倫風宏話

一本の大樹が教えること

上廣哲治

先ごろ、東京にある明治神宮外苑の再開発をめぐって、大規模な樹木の伐採計画が進んでいるという記事が新聞に載っていました。計画によれば、老朽化した神宮球場と秩父宮ラグビー場が建て替えられるほか、新たにホテルや高層ビルが建設されるとのこと。このエリアには、樹齢百年の大木を含む約千九百本の樹木があり、そのうちの約九百本が伐採の対象になっているといいます。

明治神宮の周辺は、日本で初めて「風致地区」に指定されたところです。風致地区の制度は、都市の自然景観を維持・保存するためにつくられたもので、指定された地区では、条例によって建築物の造成や樹木の伐採などに一定の規制がかけられています。東京都は、この地区の建物の高さを十五メートルまでとしてきましたが、東京オリンピックの会場である国立競技場を建て替えるために規制を緩和しました。そのため、再開発が本格化したともいわれます。

明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后を祀るため一九二〇（大正九）年に創建されました。約七十万平方メートルに及ぶ広大な境内（内苑）は、延べ約十万人の青年団の勤労奉仕によって整備され、全国から集められた三百六十五種、約十二万本の樹木が植えられました。こうして人工的につくられた内苑も百年の時をへて、今では自然の森と見紛うほどの姿になっています。この深い森に入ると都会にいることを忘れ、なんともいえない清涼感に満たされます。

一方、明治神宮とは別の記念施設として青山練兵場跡に設けられた外苑も、全国からの寄付金と献木、青年団の勤労奉仕によって造営されました。とりわけ聖徳記念絵画館前のイチョウ並木は、東京でもっとも美しい街路樹として知られ、木々が色づくころには大勢の人が深まりゆく秋を味わいに訪れます。この地域の開発計画にはさまざまな意見がありますが、自然と人間の調和という観点からも慎重に検討してみる必要があると思います。

ずいぶん前のことになりますが、知人から「鳥総立」という古い言葉を教えていただいたことがあります。「鳥総」とは木の幹や枝の先端部分のことで、昔の人は木を伐採したあと、切り株や地面にこれを立てて山の神に供えたといいます。人は古くから、木をただ利用するばかりではなく、魂の宿る存在として尊び、その命に感謝してきたのです。このような人と自然との親密な関係について、江戸時代末期の農民思想家二宮尊徳は次のように語っています。

「世界で、人間はもとより禽獣・虫魚・草木にいたるまで、およそ天地のあいだで生をうけているものは、みな天の分身というべきだ。どうしてかといえば、孑孑でも、蜉蝣でも、草木でも、天地の造化の力をかりないで、人力で生育させることはできないからである」（児玉幸多訳「二宮翁夜話」、『日本の名著26　二宮尊徳』）

人は「万物の霊長」としてさまざまな生きものを自分勝手に支配しているけれど、すべては大自然の

摂理の下で生きている。だからこそ、人はこの摂理に従わなければならないと説いているのです。

大木が伐られる情景を想像しながら、私はある絵本のことを思い出していました。それは、ひとりの少年と大きなリンゴの木の「交流」を描いたシェル・シルヴァスタインの『おおきな木』（村上春樹訳）という絵本です。原作の題名は「The Giving Tree」（与える木）で、このリンゴの大木は文字どおり、最初から最後まで少年に何かを与えつづけます。

物語は、少年が木の葉で遊んだり、木登りをしたり、リンゴの実を食べたり、かくれんぼをしているところから始まります。少年は木のことが大好きで、木も少年のことが大好きでした。しかし、成長とともに少年の心はだんだん木から離れていきます。ある日、大きくなった少年が木の下にやって来ると、木は以前のように遊ぼうと誘いますが、少年は「もうそんな年ではない、ものを買って楽しむためのお金が欲しい」というのです。すると木は、枝になっているリンゴを売りなさいといい、少年はありったけの実を集めて持っていきました。それでも木は「しあわせ」でした。

次に少年が現れたのは、大人になってからでした。家がほしいという少年に、木は枝を切って家を建てればよいといい、少年もそのとおりにします。さらに年を重ねて現れた少年は、遠くへ行くための船が欲しいといいます。木は幹を切って船をつくればよいといい、少年はその船で遠くへ旅立ちます。

また時間がたち、年老いたかつての少年が現れると、切り株となった木はもう自分には与えるものが何もないといい、少年もまた、必要なものは何もないといいます。ただ腰を下ろして休める場所があれば、という彼に、木は自分の上に座るよう勧めます。老いた少年がその切り株に腰を下ろしたところで、物語は終わります。最後のページには、「それで木はしあわせでした」という言葉が記されています。

幼いときには木と一緒に遊んでいた少年が、成長するにつれ、木を「一方的に利用する対象」として見るようになる。その身勝手さに眉をひそめる読者もいるでしょうし、少年のわがままを黙って受け容れる木に「若者を甘やかす大人」の姿を重ね合わせる読者もいるでしょう。あるいは、少年に対する木の無償の愛を称える人がいるかもしれません。

さまざまな解釈が可能ですが、ここでは人と自然の「共生」という観点からこの物語を見てみましょう。共生とはもともと、異なる種類の生物が緊密な関係をもって共存することで、生物どうしが互いに利益を受け合う「相利共生」と、片方だけが利益を得る「片利共生」があるといわれます。たとえばサメとコバンザメの関係は、コバンザメだけが利益を得るので片利共生にあたります。この場合、サメにはまったく利益がないけれど、害もないのが特徴です。ところが、自然界には片方だけが利益を得て、もう一方に何らかの害を与えるような「片害」的な関係もあります。寄生がこれにあたります。

人と自然は、人が自然から一方的に恵みを得ているという意味で、片利共生的な関係にあるといえます。昔の人はそのことをよく知っていたため、先ほど紹介した「鳥総」を立てるような儀式も行われてきたのです。しかし、現代の私たちの自然に対する態度は、片利どころか「片害」の段階に入っているのかもしれません。『おおきな木』の物語は、その危うさに警鐘を鳴らしているような気がします。

物語の最後で、木の切り株は、孤独な老人となった少年を以前と変わらない愛情で迎え入れ、少年も自然の摂理を受け容れるように、そのなかに溶け込んでいきます。そして、ようやく取り戻すことができた親密な関係を、木は「しあわせ」に思うのです。自然の恩恵を受けなければ生きていけない私たちはいま一度、この親密な関係をどのように築いていくのか、真剣に考えなければならないと思います。